

韓国で使われている日本語教科書における受身文について

許 明子

要 旨

韓国国内の日本語教育の現場で教材として用いられている日本語教科書や文法書の中で受身文がどのように教えられているかについて分析した結果、韓国人学習者が日本語の受身文の学習において起こりやすい問題点が明らかになった。韓国国内で用いられている日本語教科書の中には「(ら)れる」が受身、自発、可能、尊敬の意味を持つことを強調して述べている教科書が多かったため、韓国人学習者が日本語の受身文の意味を理解することは容易なことではないと思われる。また、韓国語の漢語動詞の受身文は「되다」受身文を中心に非常に多く使われており、韓国人学習者において特に誤用が多く見られているが、漢語動詞に関する説明はほとんど触れられていなかった。さらに、韓国で出版されたほとんどの日本語教科書において日本語の受身文は日本の日常生活において頻繁に使われているという記述がなされており、このような学習を行った韓国人学習者は日本語の受身文を過剰使用する可能性がある。韓国語の中で受身文がどのように用いられており、それは日本語でどのように表現できるかについてさらに詳しい対照研究を行い、韓国語との対照を通して語用的な特徴を理解させる必要がある。

【キーワード】 韓国人日本語学習者、日本語の教科書、日本語の文法書

On Passives in Japanese Textbooks in Korea

Heo, Myeongja

Abstract

This article examines the characteristics of the descriptions of passives in Japanese language textbooks used in Japanese language education in Korea. The findings indicate that Korean learners face a number of problems with Japanese passives. Explanations emphasize that Japanese passives are more complex than Korean passives in three respects ; a) “(ra) reru” has four meanings, passive, spontaneous, potential and honorific, making it difficult for Korean learners to understand the meaning of passive sentences, b) although Korean uses many passive Sino-verbs with “doeda”, and Korean learners make many errors with passive Sino-verbs in Japanese, there is little explanation of passive Sino-verbs, c) passive sentences are used more in Japanese than in Korean, causing possible overuse of passive with Korean learners.

1. はじめに

日本語と韓国語は語順や文法的な構造などが酷似しており、韓国人母語話者が外国語を学習する際に日本語は他言語よりも学習しやすい言語であると言える。しかし、上級レベルに達した韓国人日本語学習者（以下、韓国人学習者と呼ぶ）でも習得が難しく、誤用が多く見られる構文があり、そのような構文の一つに受身文がある。

日本で日本語を学ぶ多くの韓国人学習者は母国で初級レベルの学習を終えて来日し、日本語の学習を続ける既習学習者が多いため、中級レベル以上の韓国人学習者に受身文を効果的に指導するためには韓国人学習者が母国でどのように受身文を学習したかを考察することが必要であると思われる。そこで、本研究では韓国人学習者が受身文を学習する際に生じる問題点を母国における学習過程に焦点を当てて分析を行う。韓国の国内で日本語の教材として用いられている教科書及び文法書の内容を分析し、韓国人学習者に受身文の誤用が現れやすい原因について考察を行う。

2. 調査の内容

韓国の日本語教育の現場では韓国国内で作成された日本語教科書と、日本国内で作成されて韓国語に翻訳された日本語教科書の二種類が用いられている。本調査では主に韓国の国内で作られ、大学において日本語教育の教材として用いられている教科書を中心に分析を行った。今回の調査対象になった日本語教科書及び文法書のリストは次の通りである。

○日本語の教科書

調査対象初中級教科書	著者及び発行機関
大学日本語講座	金正泰著, 経林出版社(1978)
日本語 I・II	ソウル大学校語学研究所(1978)
生活日本語첫걸음	蜚雪出版社(1996)
ベスト日本語教本	図書出版語学界(1990)
大学日本語	慶北大学校日本語教材編集委員会(1994)
大学日本語	釜山女子大学校(1995)
Hong-ik長沼日本語教本3(韓国語版解説)	李成圭著, Hong-ikメディア(1996)
実践日本語会話	孫大俊・高橋萬里子, 図書出版博而精(1998)
実践日本語読本	孫大俊・申英媛共著, 図書出版博而精(1999)
大学生のための実用日本語	図書出版博而精(1999)
NIHONGOBANK FREETALKING	NIHONGO BANK(2000)
文化日本語2(韓国語版)	時事日本語社(2000)
TOP JAPANESE 2	時事日本語社(2000)

○日本語の文法書

調査対象文法書	発行機関及び著者
現代日本語ガイド I	全基定著, 博英社(1982)
大学日本語	祥明女子大学校日本語教材編集委員会(1982)
大学日語文法	許椒著, 博英社(1983)
日語文法	全基定著, 博英社(1983)
精解日本語総合研究	朴允哲著, 蛍雪出版社(1991)
文型中心の日語文法	李義斗著, 蛍雪出版社(1993)
東洋文庫 日本語文法	日本語教材開発研究所(1993)
初めから学ぶ日本語文法	ソン・ボンキュン著, 図書出版イエガ(1998)
類型別例文中心の現代日語文法	鄭秀賢著, 図書出版博而精(1998)
日本語文法HARAJUKU Ver3.0	図書出版ウルジ外国語(2000)

以上の教科書と文法書には日本の日常生活に使われている、より自然な日本語を習得することを目的として作成したということが記されていた。また、ほとんどの教科書において受身文は後半部分で学習する項目として提示されており、日本における日本語教科書と同じ傾向であった。

各教科書の構成は、基本的な例文や会話文を通して学習する文型を提示した後に、日本語と韓国語を比較しながら文法説明や重要な学習項目の説明を行っているというような教科書が多かった。

2. 1 韓国語との対照による文法説明

本節では韓国の国内で作られた日本語の教科書及び文法書の中で受身文がどのように説明されているかについて本文の分析を通して考察を行う。以下、それぞれの教科書の中に論じられている説明部分を引用し、筆者が日本語に翻訳をつけた。各教科書において説明が共通している部分に__を引いた。

①『大学日本語講座』金正泰著、経林出版社 (1978)

일본어의 受身 은 우리말로 옮길 때 곤란한 경우가 많다. 일본어의 受身 을 우리말로 옮길 때는 우리말식 표현으로 意識 하는 것이 좋다. 또, 우리말 표현 방식으로 생각하면 우수한 것도 일본어에서는 꼭 受身 으로 써야만 자연스럽고, 일본어다운 일본어가 되는 것들이 많이 있음을 명심하고 일본어의 受身 공부를 철저히 하기 바란다. (p.298)

[筆者訳:日本語の受身は韓国語に訳する時に困難な場合が多い。日本語の受身を韓国語に訳する時は、韓国語式の能動表現に意識した方がいい。また、韓国語式の表現方式で考えると、おかし表現であっても日本語では必ず受身文を使った方が自然で、日本語らしい日本語になる場合が多いことを注意して、日本語の受身の勉強を徹底的にしてほしい。]

②『日語文法』金期定著、博英社 (1983)

일본어에서 피동형을 우리말로 번역할 때는 경우에 따라 우리말에 맞게 능동형으로 고쳐서 해석해야 한다는 것을 알아 두어야 한다. (p.99)

[筆者訳：日本語の被動形⁽¹⁾を韓国語に翻訳する時は場合によっては韓国語式の能動形に変えて解釈しなければならないことを知っておかなければならない。]

일본어에서는 우리말과는 달리 피동의 표현을 자주 쓴다. 따라서, 일본어 다운 일본어를 표현하려면 우리말의 감정을 버리고, 그 문장을 잘 생각해서 피동의 표현을 잘 해야 한다. (p.99-100)

[筆者訳：日本語は韓国語とは違って被動の表現を頻繁に用いる。従って、日本語らしい日本語を表現したい時には、韓国語の感情を捨てて、その文をよく考えて被動の表現を使わなければならない。]

③『精解日本語総合研究』 朴允哲著. 蜚雪出版社 (1991)

이 말은 우리말의 피동보조어간 “리,히” 등에 해당되는 조동사이다.

[筆者直訳：この表現は韓国語の被動補助語幹li, hi等に該当する助動詞である。]

피동형 れる·라れる 는 경우에 따라 곤란하다는 뜻이 있다. 피동형은 경우에 따라 능동형으로 고쳐 해석해야 자연스럽다. (p.161)

[筆者訳：被動形「れる·라れる」は場合によって「困難である」という意味がある。被動形は場合によっては能動形に変えて解釈した方が自然である。]

④『日本語』 東亜大学校日本語教材編纂委員会編者 (1993)

통상의 문을 수동형으로 바꾸는 것으로서 화제의 중심을 이동하는 것이 가능하다. 능동태로서는 적극적인 인상을 받기 때문에 수동태로서 그 느낌과 인상을 부드럽게 하는 경우가 있다. 「彼は私をデートに誘った」의 문에서는 私 (내쪽)의 적극적인ニュ앙스가 나타나기 쉽고, 조금 자만하고 있는 듯한 느낌도 포함되기 쉽다. 그러나 「彼にデートに誘われた」의 경우에는 동작의 책임이 모두 彼(그)에게 있고 私(나)는 그것을 받아서 소극적인 행동이 표현되어 있다고 볼 수 있다. 단 일본어의 특징중 하나인 제3자를 주어로 하여 습관적이고 피해를 나타내는 수동태의 예를 살펴볼 수 있다. (p.88)

[筆者訳：通常の文を受動態に変えることで話題の中心を移動することができる。能動態は積極的な印象を与えるため、受動態で柔らかく表現することがある。「彼は私をデートに誘った」という文では私の積極的なニュアンスが現れやすく、少し自慢しているような印象も与えやすい。しかし「彼にデートに誘われた」という表現には動作の責任が全て彼にあり、私はそれを受けただけだという消極的な行動が表現されていると見られる。ただし、日本語の特徴の一つとして第三者を主語にして習慣的に被害を蒙ったことを表す受動態の例が見られる。]

⑤『大学日本語』 慶北大学校日本語教材編集委員会 (1994)

피동의 용법에는 일반적으로 행동을 받는 용법과, 주어가 그 행동으로 인해서 피해를 받는 심리를 나타내는 경우에 쓰는 용법이 있다. 후자를 피해의 피동이라고 한다.

피해의 피동은 흔히 자동사를 피동형으로 하는 것을 말한다. (p.215)

[筆者訳: 被動の用法には一般的に行動を受けたことを表す用法と、主語がその行動によって被害を受けたという心理を表す場合に使う用法がある。後者を被害の被動という。被害の被動は一般的に自動詞を被動形にすることを言う。]

⑥ 『회화를 위한 일본어문법특강』 김정빈 著. 時事日本語社 (1995)

우리가 보통 사용하는 「~하다」라는 말은 능동입니다. 그러나 남에게 「~함을 당하다」라는 말은 수동표현입니다. 일본은 이런 수동표현이 발달되어 있습니다. 우리와는 달리 일본인의 사고방식은 「나(わたし)」 중심이기 때문입니다. 우리는 “제가 나를 때렸어”라고 말하지만 일본인은 “나는 재에게 얻어 맞았어”라고 말합니다. 이는 한국인은 대부분 남의 입장에서 말을 하지만 일본인은 자기의 입장에서 말을 하기 때문입니다. 이런 차이가 일본어와 한국어가 다른 점입니다. 자연스러운 일본어 표현을 구사하고 싶으시다면 수동표현은 필수 과목입니다! (p.95)

[筆者訳: 私達が普段使っている「~する」という言葉は能動です。しかし、他人から「~することをされる」という言葉は受動表現です。日本語はこのような受動表現が発達しています。私達とは違って日本人の思考は「わたし」中心であるためです。私達は「あの子が私を殴った」と言うが、日本人は「私はあの子に殴られた」と言います。これは韓国人はほとんど他人の立場で話すが、日本人は自分の立場で話すためです。このような違いが日本語と韓国語が異なるところです。自然な日本語の表現を使いたいなら受動表現は必須です。]

⑦ 『일본어뱅크 일본어회화 2』 朴舞愛 著. 일본어뱅크 (1995)

일본어에서는 한국어에 비해 「受身形」(수동태)가 많이 사용된다. 하지만 무조건 수동태를 써도 좋다는 것은 아니고 「화자의 관심의 대상」이 주어가 된다고 생각하면 이해하기 쉬울 것이다. (p.203)

[筆者訳: 日本語は韓国語に比べて受身形が多く使用される。しかし、いつでも受身が使えるというわけではなく、「話者の関心の対象」が主語になると考えれば理解しやすい。]

⑧ 『일본어뱅크 프리토킹』 朴舞愛 著. 일본어뱅크 (2000)

일본어의 문장에서는 한국어보다 많은 수동태가 사용되고 있다. 이것은 「관심의 대상이 주어가 된다」라고 생각하면 이해가 쉽다. 일본어에서는 크게 분류해서 세종류의 수동태문이 있다. (p.7)

[筆者訳: 日本語の文章では韓国語より多くの受動態が使われている。これは「関心の対象が主語になる」と考えれば理解しやすい。日本語では大きく分類して三種類の受動態文がある。]

⑨ 『생활일본어첫걸음』 문경임 著. 蜩雪出版社 (1996)

주어의 의지와 관계없이 다른 요인에 의해 주어가 그 동작을 받는다는 것을 나타내며 「~당하다」, 「~해 지다」로 해석한다. (p.221)

[筆者訳: 主語の意志と関係なく他の要因によって主語がその動作を受けることを表す表現で

[~ danghada]、[~ hae jida] で訳すことができる。]

⑩ 『実践日本語會話』孫大俊・高橋万里子共著、図書出版박이정 (1998)

특히 수동표현의 경우는 우리말로 직역이 어려운 것이 있다. 이러한 경우는 자연스럽게 의역을 해야 할 것이다. 「昨日は雨に降られました」어제는 비를 맞았습니다、「わたしは三才のとき、父にしなければ」나는 세살때 아버지가 돌아가셨습니다、「きのう友だちにこられて、何もできませんでした」어제 친구가 와서 아무것도 할 수 없었습니다. (p.54)

[筆者訳:特に受動表現の場合は韓国語に直訳しにくい場合がある。その場合は自然な感じで意訳をしなければならない。]

⑪ 『大学生のための実用日本語』尹相實、李美淑、斎藤麻子共著。図書出版박이정 (1999)

일본어에서는 수동표현이 자주 쓰인다. 용법으로는 크게 직접수동과 간접수동으로 나눌 수 있고 특히 후자의 용법에서 일본어의 특징을 찾을 수 있다. 직접수동은 대응하는 능동문이 있는데 반해서 간접수동은 직접 대응하는 능동문이 없는 점에서 구별된다. 간접수동은 말하는 사람의 <곤란을 당하다, 피해를 입다>라는 의식이 작용하고 있음을 나타낸다. (p.231)

[筆者訳:日本語では受動表現がよく使われている。用法としては大きく直接受動と間接受動に分けられ、特に後者の用法で日本語の特徴が見られる。直接受動は対応する能動文があるのに対して間接受動は直接対応する能動文がない点で区別される。間接受動は話し手の<困難に陥った、被害を蒙った>という意識が作用していることを表す。]

⑫ 『文化日本語 (韓国語解説版)』時事日本語社 (2000)

일본어의 피동에는 단순한 피동의 뜻만 나타내는 것 외에, 「 좋지 않은 의미」를 나타내는 표현이 있습니다. 이 파에 나와 있는 피동은 모두 「 좋지 않은 의미」로 쓰인 것들입니다. 이러한 피동을 우리말로 해석할 때는 주어를 바꾸어 능동으로 해석해야 될 때가 많습니다. 「피ッチャーに早いカーブを投げられる」에서 「投げられる」는 「投げる」(던지다)의 피동입니다. 따라서 이것을 직역하면 「투수에게 빠른 커브를 던짐을 당한다」가 되겠지만, 우리말이 어색하므로 「피ッチャーが早いカーブを投げる」(투수가 빠른 커브를 던진다)로 해석해야 자연스러운 표현이 됩니다. 그러나 투수가 빠른 공을 던진 것이 그만 자신한테 좋지 않은 영향을 끼쳤다면 피동으로 표현하는 것이 일본어다운 일본어입니다. (p.245)

[筆者訳:日本語の被動には単純な被動の意味を表す他に「良くない意味」を表す表現があります。この課に出ている被動は全て「良くない意味」で使われているものです。このような被動を韓国語に訳す際には主語を変えて能動に訳さなければならない時が多くあります。「ピッチャーに早いカーブを投げられる」の中で「投げられる」は「投げる」の被動です。従って、これを直訳すると「投手に早いカーブを投げることをされる」になりますが、韓国語として不自

然なため、「ピッチャーが早いカーブを投げる」のように解釈すれば自然な表現になります。しかし、投手が早い球を投げたことが自分に良くない影響を及ぼしたら被動で表現した方が日本語らしい日本語です。]

これらの説明部分には日本語の受身文と韓国語の受身文の特徴の違いについて記述しているが、その内容を見ると「日本語は韓国語より受身表現が発達しており、日常生活において多く使われている」、「日本語らしい表現をするためには、韓国語では受身文が不自然な場合でも日本語では必ず受身文で表現しなければならない」、「日本語の受身文と韓国語の受動文は必ずしも対応するわけではないため、日本語の受身文を韓国語に訳す際に、時には能動文に意識しなければならない」等が共通して記されている。また、日本語の受身文と韓国語の被動文が対応しない代表的な例として「日本語には自動詞によって作られる受身文がある」、また「韓国語では能動文で表す場合でも日本語では受身文で表す」ことが記されていた。

これらの記述には日本語において受身文が頻繁に使われていることが強調されている部分が多いため、韓国語学習者が日本語の受身文を学習する際に語用的な面において誤解を招く恐れがあると思われる。つまり、日本語の受身文には韓国語の受身文として対応しないものが多く、日本語では受身文で表せる場合でも韓国語では受身文で表せず日本語の受身文と韓国語の受身文の特徴が大きく異なっているというふうに解釈できる説明が多かったのである。また、韓国語学習者に日本語では主語が被害を受けたことを表す場面では受身文を使うことが自然な感じを与えるという誤解を招く可能性がある。そのような誤解から受身文の過剰使用に繋がる恐れがあると思われる。

しかし、両言語の受身文は形態的な特徴は異なるものの、意味的な特徴や構文的な特徴においては類似点が多く存在している。従って、その類似性を日本語の学習に応用すればより効果的な受身文の学習が可能であると思われるが、韓国国内で作成された日本語教科書には両言語の受身文の相違点に関する説明が目立っており、韓国語学習者に受身文の学習の困難さを感じさせるような記述が多かった。

2. 2 「(ら)れる」の意味に関する説明

本節では、前節で行った韓国国内で作成された日本語教科書における「(ら)れる」の文法説明の分析に基づいて韓国語学習者が日本語の受身文を学習する際に生じると予測される問題点について検討を行う。それぞれの教科書には「(ら)れる」について次のような説明がなされていた。

①『実践日本語読本』図書出版 박이정 (1999)

동사에 붙는 조동사의 일종인 「~れる」、「~られる」는 여러가지 기능을 가지고 있다. 수동의 기능외에 가능, 존경, 자발등 여러가지 기능을 가지고 있으므로, 앞뒤의 문맥을 살펴서 잘 판단해야 한다.」(p.159~160)

[筆者訳：動詞に接続する助動詞の一種である「れる」「られる」は様々な機能を持っている。受身の機能以外にも可能、尊敬、自発などさまざまな機能を持っているため、前後の文脈をよく見て判断しなければならない。]

② 『생활일본어첫걸음』 문경임 著. 萤雪出版社 (1996)

「れる」는 五段活用動詞・サ行変格動詞의 未然形에 붙는다. 「られる」는 上一段・下一段・カ行変格動詞의 未然形에 붙는다. 수동·가능·자발·존경의 의미를 갖는다. (p.193)

[筆者訳：「れる」は五段活用動詞・サ行変格動詞の未然形につく。「られる」は上一段・下一段・カ行変格動詞の未然形につく。受動・可能・自発・尊敬の意味を持つ]

③ 『日本語文法 HARAJUKU Version3.0』 도서출판 을지외국어 (2000)

i) 5 단동사수동형 「~れる」의 용법

5 단동사에 접속하여 수동형을 만드는 「~れる」는 하 1 단활용을 하며 주어의 의지로 행동이 이루어진 것이 아니라 주어가 자기 의지와는 관계없는 요인으로 행동을 받게 되는 경우에 쓰인다. 따라서 타인으로부터 어떤 행동을 받는다는 뜻으로 문장의 전후관계를 보고 해석해야 한다. (p.332)

[筆者訳：5段動詞に接続して受身形を作る「~れる」は下1段活用をし、主語の意思で行動を行うのではなく、主語が自分の意思とは関係のない要因で行動を受けることを表す場合に使われる。従って、他人からある行為を受けるという意味で文章の前後関係を見て解釈しなければならない。]

ii) 상 1 단, 하 1 단 동사, 변경동사 수동형 「~られる」의 용법

상 1 단, 하 1 단 동사에 접속하여 수동의 뜻을 나타내는 조동사 [られる]도 [れる]와 마찬가지로 하 1 단동사활용을 한다. 변경동사くる는 こられる 이고, する는 される 이다. (p.333)

[筆者訳：上1段、下1段動詞に接続して受身の意味を表す助動詞「られる」も「れる」と同じく下1段動詞活用をする。変格動詞「くる」は「こられる」で、「する」は「される」である。]

iii) 동사수동형 「(라) れる」의 존경용법

수동형 「(라) れる」는 [하시다]의 뜻으로 상대방의 행위나 동작을 높여 말하는 존경의 용법으로도 쓰인다. (p.334)

[筆者訳：受身形「(라) れる」は「なさる」の意味で相手の行為や動作を敬って話す尊敬の用法としても用いられる。]

iv) 동사수동형 「(라) れる」의 가능용법

수동형 「(라) れる」는 [할 수 있다]의 뜻으로 가능으로 쓰인다. 그러나 5 단동사의 경우는 앞에서 배운 가능형을 많이 쓴다. 참고로 젊은이들 사이에서는 「~られる」를 줄여서 「~れる」로 표현하는 경우가 많다. (p.335)

[筆者訳：受身形「(ら)れる」は「～することができる」という可能の意味で用いられる。しかし、5段動詞の場合は可能形をよく使う。参考までに若者の間では「～られる」を縮めて「～れる」のように表現することが多い。]

v) 동사수동형 「(ら)れる」의 자발용법

수동형 「(ら)れる」는 심리적인 활동을 나타내는 일정한 동사에 접속하면 저절로 그렇게 되다라는 자발의 뜻을 나타낸다. (p.336)

[筆者訳：受身形「(ら)れる」は心理的な活動を表す一定の動詞に接続すると自ずとそうなるという自発の意味を表す。]

④ 『初めから学ぶ日本語文法』 ソン・ボルキュン著. 図書出版イエガ (1998)

일본어동사에 「(ら)れる」가 접속하면 수동의 용법 이외에 가능의 용법과 존경의 용법, 자발(자연히 그렇게 일어나는 행동)의 용법이 있다. (p.213)

[筆者訳：日本語の動詞に「(ら)れる」が接続すると受身の意味以外に可能の用法と尊敬の用法、自発の用法（自然に行われる行動）の用法がある。]

⑤ 『文型中心の日本語文法』 李義斗著. 蜚雪出版社 (1993)

조동사 「れる」, 「られる」는 4 가지 의미를 가지고 있다. 즉, 수동(～되다당하다), 가능(할 수 있다), 자발(저절로 ~하다), 존경(하시다)의 의미를 가지고 있다. (p.110)

[筆者訳：助動詞「れる(られる)」は4つの意味を持っている。つまり、受動(～される)、可能(～することができる)、尊敬(～される)の意味を持っている。]

以上のようにいくつかの文法書や教科書における受身文の意味に関する説明について述べたが、これらの記述から韓国学習者が日本語の受身文を学習する際に最も生じやすい問題点として考えられることは「(ら)れる」が持つ意味の複雑さに関する混同である。韓国国内で作成された教科書の中では「(ら)れる」の意味について受身の意味だけではなく、自発・可能・尊敬の意味を表すことが強調されており、それらの意味が同時に提示されているため韓国学習者には「(ら)れる」の形態が持つ意味について混同を招く恐れがあると思われる。このような受身文の説明は日本における日本語教科書においてはほとんど見られないような記述であり、学習者に受身文の意味について混乱を招く可能性がある。「(ら)れる」が受身の意味を表す場合の構文的な特徴と、可能の意味を表す場合の構文的な特徴が異なるが、韓国学習者にはそれぞれの意味における構文的な特徴が十分に理解されない恐れがあるのである。

韓国国内で日本語を学習している韓国学習者が受身文の語用的な特徴を理解することは容易なことではないが、その上、本節で述べたような「(ら)れる」の持つ意味の複雑さが強調されると韓国学習者において日本語の受身文は習得しにくい表現の一つとして認識される可能性が高いと思われる⁽²⁾。

また、韓国の国内で作成された日本語の教科書におけるもう一つの大きな問題点としてあげられることは漢語動詞の受身についてほとんど触れられていないことである。韓国語において

動詞述語文の中で漢語動詞の占める割合は非常に高いが、今回の調査の対象になった教材においてはわずか二つの文法書においてのみ韓国人学習者の間違いやすい漢語動詞の例をあげただけであった。例えば、『文型中心の日語文法』(113頁)では受身形が作れない「漢語+する」動詞について「関係する、関連する、安定する、感動する、感染する、発展する、発生する、成長する、普及する、矛盾する、緊張する」などの動詞があげられている。『일본어뱅크 프리토킹』(9頁)では「安定する、関係する、感染する、感動する、関連する、緊張する、矛盾する、成功する、発展する、発生する、成長する、普及する」などの動詞は日本語では自動詞であるため、無意思の受身文には使われないと述べられている。

韓国語では漢語動詞の受身文は主に「漢語名詞+하다」動詞を「漢語名詞+받다」に交替することによって受身文が作られるが、漢語名詞の特徴によっては「하다」が「받다」「당하다」等に交替して受身文が作られる。これらの漢語動詞の受身文の形態的な特徴が学習者に十分に認識されない場合、韓国人学習者は上にあげた自動詞の漢語動詞を含めて「漢語名詞+되다」を安易に「漢語名詞+される」に直訳するような表現を使うことがあり、「発展される、成長される」のような誤用が現れるのである。韓国語の漢語動詞の受身表現の複雑さと「하다」を「되다」に交替すれば受身文が作れるという安易な理解の仕方が日本語の漢語動詞の受身文の誤用に繋がる原因になっていると思われる。韓国語の漢語動詞の占める割合の高さから日本語の漢語動詞の受身文に関する学習は重要であるが、各教科書や文法書において漢語動詞の受身に関する説明が十分とは言えない状況であることが分かった。

3. 分析結果から分かったこと

以上、本研究の分析結果から韓国人学習者が日本語の受身文を学習する際に起こり得る問題点について意味面、形態面、語用的な面から予測することができる。本節では今回の調査の分析結果に基づいて韓国人学習者の受身文の学習に関する問題点について検討する。

まず、形態的な面における分析から考察を行う。韓国語の受身文には「이·히·리·기」「지다」「되다」「받다」「당하다」等の様々な形態が存在するが、日本語は「(ら)れる」の一つの形態によって受身の意味を表すため、韓国人学習者は日本語の動詞に「(ら)れる」が接続して受身の意味を表すという形態的な特徴については大きな問題はないと思われる。しかし、韓国語の受身の形態について明確に認識されない場合、韓国語のどの形態が日本語の受身文で表せるかについて十分に理解されない可能性がある。つまり、固有語動詞の受身を表す接辞「이·히·리·기」は場合によっては使役の意味を表したり、自動詞の意味を表したり、可能の意味を表したり、状態の変化の意味を表したりするが、「이·히·리·기」が接続している固有語動詞を機械的に「(ら)れる」に置き換えると誤用が起きやすいのである。そのような誤用は特に漢語動詞において顕著に現れている。つまり、韓国語において「漢語名詞+되다」の漢語動詞を機械的に「漢語名詞+される」に置き換えてしまう傾向がある。

次に、意味的な面における分析結果から、各教科書において「(ら)れる」の意味について共通して受身、可能、自発、尊敬の意味を表すことを同時に説明しており、「(ら)れる」の形態が持つ意味について複雑性を強調している傾向があったからである。従って、韓国で日本語の初級レベルの学習を終えた韓国人学習者は「(ら)れる」の意味について混同している可能性が高いと予想されるため、まず受身の概念や意味を正確に理解させた上で自発、可能、尊敬等の意味について段階的に理解させる必要がある。

さらに、語用的な面においては韓国語では受身文を使わない場合でも日本語では受身文を使うという記述が多かったため、受身文の語用的な特徴を知ることが最も困難であろうと考えられる。実際に日本語教育の現場において日本語母語話者が自動詞構文で現す場合でも韓国人学習者は受身文で表す傾向が現れており、それは韓国国内における日本語教科書の記述の影響も一つの要因として考えられる。しかし、許(1999)では日本と韓国の日常生活で使われている受身文と受身文の使用率を分析した結果、話し言葉と書き言葉において両国の受身文の使用率に違いがあることを明らかにした。両国の話し言葉においては日本語の受身文は全体会話文の約6.5%、韓国語は約2%に過ぎなかったものの、日本語の受身文の方が韓国語の受身文より若干高い使用率を示していたが、書き言葉においては日本語が12.4%、韓国語が20%で韓国語の受身文の方が高い使用率を示していた。この分析結果から日本語の受身文と韓国語の受身文は日常生活の中では使用頻度が低く、文体の違いによって異なる語用的特徴を持っていることが分かる。従って、両国の日常生活において日本語の受身文が韓国語の受身文より頻繁に用いられているという記述は両国の受身文の語用的な特徴を十分に反映したものとは言えない。韓国人学習者に母語である韓国語の受身文の使い方についてもっと明確に認識させる必要があるであろう。

4. 日本語教育現場への提案

本研究では韓国の国内で用いられている日本語教科書や文法書に受身文がどのように説明されており、韓国語の受身文とどのように比較されているかについて分析を行ったが、本節では分析の結果に基づいて韓国人学習者を対象にする日本語教育現場で学習者が受身文を学習する際に起こりやすい問題点について整理すると共に、どのような点に留意して受身文を指導すべきかについて提案を行う。それは次の三点にまとめることができる。

第一、韓国人学習者は韓国語の受身文の形態の複雑さによって受身に関する概念が十分に理解されていない可能性があるが、日本語教科書の中でも韓国語の受身文と日本語の受身文の概念に関する比較が不足しており、「ある動作を受けることを表す」という大まかな説明しかなされていなかった。さらに、「(ら)れる」の意味について受身のみならず、自発、可能、尊敬の意味を持つことを強調している教科書が多いため、韓国人学習者は日本語の受身文の意味を理解することに困難を感じる人が多いと思われる。従って、韓国人学習者に日本語の受

身文を指導する際には動作の行われる方向性と主語と客体の関係を明確に示し、動作の受け手と仕手の関係を十分に理解させる必要がある。

第二、韓国語の漢語動詞の受身文は「되다」受身文を中心に多く使われており、韓国人学習者において特に誤用が多く見られているが、漢語動詞の受身文の学習にはあまり重点が置かれていないようである。韓国語の漢語動詞は自動詞であっても他動詞であっても「되다」が接続して被動性を帯びることがあるため、日本語において自動詞として用いられる漢語動詞には「される」が接続しないことを明確にする必要がある。

第三、韓国で出版されたほとんどの日本語教科書において日本語の受身文は日本の日常生活において頻繁に使われているという記述がなされており、このような学習を行った韓国人学習者は日本語の受身文を過剰使用する可能性があるものと思われる。韓国語の中で受身文がどのように用いられており、それは日本語でどのように表現できるかについてさらに詳しい対照研究を行い、韓国語との対照を通して語用的な特徴を理解する必要がある。

以上、本研究の分析結果に基づいて韓国人学習者を対象にする日本語教育現場における受身文の指導について提案を行ったが、韓国で初級レベルの学習を終えて、来日し、さらに日本語の学習を継続する学習者がどのような学習を行ってきたかを分析することは今後の効果的な日本語の学習を行う上で重要なことであると思われる。韓国人を対象とする日本語教育の現場で学習者の母語の特徴を理解することは、誤用が生じた場合、その誤用の原因を理解し、誤用の修正を行う解決策を模索し、さらには誤用を防ぐための指導法を考案する上で一つの手がかりになるものと思われる。本研究では受身文に焦点を当てて分析を行ったが、ヴォイス体系や他の構文についてもさらに詳しい研究が必要であるが、それは今後の課題にしたい。

注

- (1) 本研究で用いている「被動形」「被動文」「被動表現」等の用語は韓国語において受動の意味をさす文や表現として韓国語の教科書に使われていたものをそのまま日本語に直訳した用語として用いた。
- (2) ここで述べた各教科書における「(ら)れる」の接続について「5段動詞」や「上一段動詞、下一段動詞」のような日本の国文法で用いる動詞の分類をそのまま用いており、活用についても「連用形、未然形」などの用語がそのまま用いられている教科書が非常に多かった。これらの説明からも韓国人学習者にとって日本語の文法を学習することは容易なことではないと考えられる。

参考文献

- 日本語教育学会編 (1991) 『日本語教育機関におけるコース・デザイン』 凡人社
許明子 (1999) 「日本語と韓国語の受身文の実証的対照研究：両国のテレビドラマと新聞コラム

における受身文の使用率の分析を通して』『日本語教育論集 世界の日本語教育』第9号
pp.115-132
許明子 (2001) 「韓国の日本語教科書における受身文の分析」『日本語教育方法研究会誌』Vol.8、
No.2、pp.22-23

調査資料

- 『大学日本語講座』金正泰著、経林出版社 (1978)
『日本語 I・II』ソウル大学校語学研究所 (1978)
『生活日本語첫걸음』螢雪出版社 (1996)
『ベスト日本語教本』図書出版語学界 (1990)
『大学日本語』釜山女子大学校 (1995)
『Hong-ik 長沼日本語教本3 (韓国語版解説)』李成圭著、Hong-ik メディア (1996)
『実践日本語会話』孫大俊・高橋萬里子 (1998)
『実践日本語読本』孫大俊・申英媛共著、図書出版博而精 (1999)
『大学生のための実用日本語』図書出版博而精 (1999)
『NIHONGOBANK FREETALKING』NIHONGO BANK (2000)
『文化日本語2 (韓国語版)』時事日本語社 (2000)
『TOP JAPANESE 2』時事日本語社 (2000)
『現代日本語ガイド I』全基定著、博英者 (1982)
『大学日本語』祥明女子大学校日本語教材編集委員会 (1982)
『大学日語文法』許椒著、博英者 (1983)
『日語文法』全基定著、博英者 (1983)
『精解日本語総合研究』朴允哲著、螢雪出版社 (1991)
『文型中心の日語文法』李義斗著、螢雪出版社 (1993)
『東洋文庫 日本語文法』日本語教材開発研究所 (1993)
『初めから学ぶ日本語文法』ソン・ボンキュン著、図書出版イエガ (1998)
『類型別例文中心の現代日語文法』鄭秀賢著、図書出版博而精 (1998)
『日本語文法 HARAJUKU Ver3.0』図書出版ウルジ外国語 (2000)